



[令和 5 年 12 月 13 日 定例会発表要旨]

手稲の歴史掘り起し「北日本飛行学校物語」刊行にあたって

元手稲郷土史研究会 会長
郷土史家
茂内 義雄 氏

1 表題に至った経緯

私が 1962 (昭和 42) 年に手稲区曙 4 条 2 丁目に居を構え、半世紀が過ぎた。かつてこのあたり一帯は北日本飛行学校の飛行場の場所であった。1930 (昭和 5) 年に開校され、1933 (昭和 8) 年に消えた幻の学校。手稲の歴史を語るうえで欠かせないこの学校のことを長年調べてきたが資料不足だった。そこで北日本飛行学校に関係する人物として自動車学校 (現・北海道科学大学) を開校した伏木田隆作と北海タイムス (現・北海道新聞) の飛行士であった上出松太郎に関する資料を集め調べあげた。多くの方々の協力も得ながら、こうして「北日本飛行学校物語」刊行に至った。刊行後の新資料発見と資料の分析考察による中間発表もお伝えする。



2 北日本飛行学校

北日本飛行学校とは民間の飛行士養成学校である。1930 (昭和 5) 年から 1933 (昭和 8) 年に現在の手稲区曙地区にあり、その後、現在の北区北 24 条周辺にあった札幌飛行場に移転したが、詳しい資料はあまり多くはない。

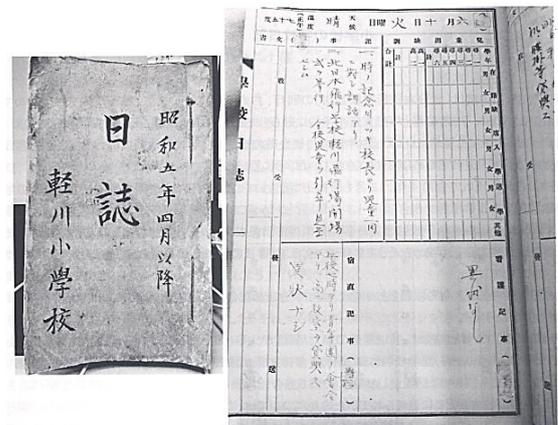
1930 (昭和 5) 年 6 月 11 日の北海タイムスには「軽川雲雀が丘で一あざやかに飛ぶ」との見出しで北日本飛行学校の購入飛行機の披露飛行について記事が書かれていた。同じく 1930 (昭和 5) 年 6 月 10 日の軽川小学校 (現・手稲中央小学校) の学校日誌には「北日本飛行学校軽川飛行場開場式ヲ挙行。全校児童を引率見学セシム。」との記述があった。学校日誌については手稲西小学校教頭の高屋先生からもお話しいただいた。この学校日誌は札幌市公文書館にて閲覧可能なのでご興味のある方はぜひご覧いただきたい。



茂内義雄氏の著作
「北日本飛行学校物語」。



1930 (昭和 5) 年 6 月 11 日の北海タイムス。
(画像筆者提供)



1930 (昭和 5) 年 6 月 10 日の軽川小学校 (現・手稲中央小学校) の学校日誌。(「北日本飛行学校物語」JP184)

3 中間発表

新事実判明

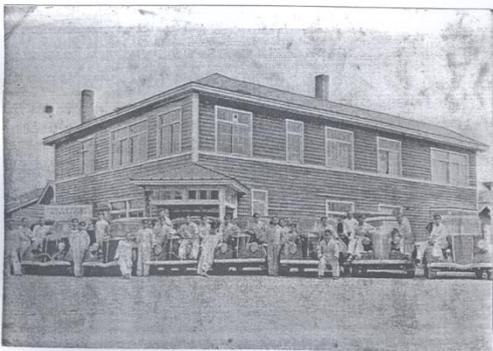
「北日本飛行学校物語」発刊後、本著を北海道新聞、読売新聞にも取りあげていただいた。マスメディアに紹介されると伏木田隆作の盟友だった、中村徳一郎の孫にあたる方からご連絡を頂き写真資料をご提供いただいた。新たな写真提供で今後の分析に明るさも見えてきた。さらに北日本自動車学校と北日本飛行学校が中村徳一郎とその弟の中村孝徳との共同経営であったことがわかった。中村孝徳は北日本飛行学校校長も務めていた。



北日本飛行学校格納庫前での『集合写真。後列左から5人目が中村徳一郎。中村孝徳も写っているとのことだが現時点では詳細不明。(画像筆者提供)

北海道協立自動車学校

北海道協立自動車学校は1931（昭和6）年3月1日に大同合併した自動車学校。現在の中島の自動車学校である。設立時の経営者は伏木田隆作、校長は戸津高地が請われ着任した。当時の学生募集は新設の北海道協立自動車学校が「札幌市外中ノ島試験会場内」と一本化されている。傘下のかつての個々の練習場については記録不足である。合併後の北日本飛行学校は北日本自動車学校と別個のものとして当時の新聞広告に載せてあるが、申込みの受付は一体化であったと思える。2つの学校は「札幌市軽川（現・札幌市手稲区）」にあった。参考までに「札幌郡手稲村（大字三村時代）地図」には1933（昭和8）年10月編集の樽川通りに飛行場が見える。



北海道協立自動車学校の校舎。
(画像筆者提供)

山鼻と伏木田

各種資料を拾い合わせながら思うに、伏木田隆作と山鼻地区には切り離せない因果関係が見え隠れしてきた。1924（大正13）年8月10日「山鼻町1052番地の自宅6畳間で運転技能教授を始めた」伏木田の述懐するところである。北海道自動車学校が発祥の小樽市緑町から札幌に進出する際、山鼻に住んでいた伏木田がその受け皿になった。伏木田の足跡は北海道協立自動車学校の引率者としての単発的な資料しかない。ただ終生活動の場は中の島の自動車学校であり、中島公園や薄野界隈であった。（「北日本

飛行学校物語」関連ページ：P19、P143）

今回、中村徳一郎の孫にあたる方から中村徳一郎の家族の本籍も山鼻で、1907（明治40）年に気仙沼から札幌に来たことを教わった。中村徳一郎8歳の時のことであった。

北日本飛行学校が札幌飛行場へ

1933（昭和8）年7月27日の北海タイムスで手稲から飛行場が去っていった。理由も知りえない。「北海道航空議会」という大きな組織（媒介的なもの）に包み込まれていったかのごとく謎である。（「北日本飛行学校物語」関連ページ：P40）

「北日本飛行学校物語」ではさほどポイントを置かず流してきた下記飛行場について問われることがあったので以下にまとめる。

【札幌飛行場】北海タイムスの飛行場であった。五番館興農園も記した。手稲村民が軽川・東京（羽田）間を夢見た航空路も札幌飛行場を舞台にして「札幌～東京間定期航空」を延々と新聞の見出し

を並べた。終戦の際、飛行機が焼き払われたこの飛行場は上出松太郎の後半生スタート地とも因縁の場であった。そして道立札幌北高等学校の学びの地にもなった。（「北日本飛行学校物語」関連ページ：P41、P42、P52、P225）

【丘珠飛行場】「丘珠百二十年史」によると1942（昭和17）年4月17日に丘珠神社の春季祭典で、丘珠から烈々布にかけての居住農家の戸主たちが突如月寒の北部軍司令部の命令で丘珠小学校に集められ強制立ち退き要求と土地の買収を伝えられた。太平洋戦争で戦勝ムードのなか、新たな飛行場が必要とされたようだ。（「北日本飛行学校物語」関連ページ：P58、P100）

【千歳飛行場】「北日本飛行学校物語」では詳細を取り上げてはこなかったが、間接的にはP38に守屋慶治著「北の翼」の引用箇所がある。千歳温故知新の会会長の橋爪氏からの提供資料で千歳空港がまもなく100年を迎えようとしていることを教わった。2023（令和5）年に97年目の空港の歴史パネル展が千歳市役所で開かれ、1926（大正15・昭和元）年に当時の千歳村民総出で飛行場をわずか2日で造り、小樽新聞社の飛行機「北海第1号」が飛来したことを発祥すると報じている。

【音更飛行場】1925（大正14）年に開場した北海道初の民間飛行場である。翌年、上出松太郎が請われてやって来た。当時の音更村民と一体となつての音更暮らしは上出に大きな影響を与えた。（「北日本飛行学校物語」関連ページ：P124、P129は帯広飛行場に関する内容を記載）

エッセイ 映画「カムイのうた」を観て

昨年末、道内6市の劇場で映画「カムイのうた」の一日限定先行上映があった。この映画は知里幸恵をモデルにしたアイヌ文化に触れる貴重な作品である。

私は昨年、手稲郷土史会バス見学会で知里幸恵の神謡集「銀の滴降る降るまわりに」の朗読の機会を与えて頂いた。恥ずかしながら、それまでは名前ではしか知識がなかったが書物で知るうちに彼女の生涯に非常な感銘を受けた。実写がどのように描かれているか、そして脚本自ら手掛けた監督、菅原浩志氏がアイヌという根深いテーマにどのように挑んだのか、非常に興味を抱いた。

当日は満席で熱気に溢れていた。席について間もなく開演前のざわつきが静寂に変わる。美しい音楽と共にスクリーン一面に北海道の四季の移ろいが展開される。花や木々、川や山、野を駆ける熊や鹿、小動物たち、そしてアイヌの守り神であるフクロウ。

”その昔、この広い北海道は私たち先祖の自由の天地でありました”

「アイヌ神謡集」序文からの一節が朗々と流れる。突然、画面を切り割くように「明治」というテロップが入り猛吹雪の中でのアイヌの強制労働のシーンに代わる。

”本当のことを伝えたい 本当の心の叫びを知って欲しい” ゆっくりと読み解くテロップの中に、この映画のテーマが提示されていく。この作品の中で監督が特に強調しているシーンは「差別」と「遺骨の盗掘」である。まさにアイヌが直面してきた怒りや悲しみにしっかりと向き合い、映像という手段でリアルに訴えてくる。

知里幸恵の生涯については郷土史会では既に周知のことゆえ割愛するが、アイヌというだけで希望の女学校に行けず、職業学校に入学するも、そこでの執拗なまでの差別。「こんな思いまでして教育を受ける必要があるのか」幸恵は自分がアイヌに生まれてきたことに苦悩する。



映画「カムイのうた」のポスター。

行き場のない苦しみ。幸恵の輝かしい業績の底にある本当の姿を本作品は引き出して行く。

明治になってアイヌ民族の研究と称する「墓荒らし」同然の状況が勃発した。映画の中では幸恵を慕う青年の親の墓が盗掘される。青年は毎晩、集団の墓泥棒の暴力にも屈せず張り込む。村の交番に陳情するも足蹴にされ「俺たちは犬同然の扱いだ」と呟く。

遺骨は尊厳ある魂そのもの、決して「物」ではない。もし自分の大切な家族の遺骨が盗掘されたら・・・想像するに耐えがたい。

日本政府がアイヌの人々の返還を求める遺骨について動き出したのは、平成に入ってからである。しかも令和に入って申請の受付を締め切っている。戻れない遺骨が沢山ある。このような理不尽な憤りが今も続いているとしか思えない。

映画では金田一が青年の父親の遺骨を奪還すべく大学の研究室の教授と大乱闘になる。この事実は今作品を通して初めて知ることになった。金田一の熱意は幸恵にアイヌとしての誇りを目覚めさせ、生きる勇気を与えた。アイヌが培ってきた文化や魂を絶やしてはならない、神謡集は命をかけてでも継いでいくもの、幸恵は使命感に突き動かされる。そして襲い来る心臓発作と戦いながらも遂に完成させるのだ。だが書き上げたその夜、幸恵の命は果て、天に召される。

「アイヌに生れアイヌ語の中に生ひたつた私、私たちを知つて下さる多くの方に 読んでいただく事が出来ますならば、私たちの同族祖先と共にほんとうに無限の喜び、無上の幸福に存じます。」
(神謡集 序から一部抜粋)

幸恵の言葉をそのままこの映画に添えたい。

カルカッタ国際映画祭(インド) インターナショナル映画部門で最優秀賞作品賞。モントリオール・インデペンデント映画祭(カナダ)では優秀作品賞受賞グランド・シネ・カーニバル・モルディブで優秀作品賞を受賞。スペインのハーキュリー・インディペンデント映画祭で優秀作品賞を受賞するなど高い評価を得ている。

(手稲郷土史研究会 会員 諸橋 弘子)

★手稲郷土史研究会会員募集中！

手稲郷土史研究会では、手稲と手稲に関する歴史・文化に興味があり、一緒に学んでいきたい方の入会を随時募集しています！毎月1回、手稲区内にて定例会を開催し、会員による研究発表や外部講師を迎えての講演等を行っています。定例会では会報誌「郷土史ていね」を配布し、希望する会員へ郵送、メールもお送りしております。年会費3,000円、入会金不要です。

入会は入会申込書、またはメールからお申し込みください。折り返しご連絡致します。

入会申込書から…手稲郷土史研究会パンフレットにあります「入会申込書」に必要事項を記入し手稲郷土史研究会会員へお渡し、またはご郵送ください。

メールから…氏名、住所、電話番号、メールアドレスを記載し、手稲郷土史研究会メールアドレスまでお申込みください。

いただいた個人情報につきましては、当研究会の活動にのみ使用し管理致します。入会についてご質問等ございましたら、お問い合わせください。

次回定例会 ⇒ 発表内容「手稲本町商店街の歴史について」松井隆文(手稲郷土史研究会 会員)

2024年2月14日(水) 18:15～ / 手稲区民センター3階 視聴覚室 ※一般の方のご参加は事前の申し込みが必要です。

手稲郷土史研究会 会報「郷土史ていね」第189号 令和6年1月10日発行

発行責任者:沖田紘昭(手稲郷土史研究会 会長) 編集:岡和田夢子

✦〒006-0818 札幌市手稲区前田8条11丁目4-5 林俊一方 手稲郷土史研究会 ✦TEL 090-3381-4994 ✦FAX 011-682-9874

✦メールアドレス teinekyoudoshi@gmail.com <担当 岡和田>